

# 世界にほこる女流文学

平安時代に書かれた『源氏物語』などの女流文学は  
当時の世界でも高いレベルの作品だった。  
それを可能にしたのは何だったのだろうか。

## ● 1000年前に書かれた大長編小説

2008（平成20）年、京都を中心に「源氏物語千年紀」としたさまざまな催しが開かれました。ちょうど1000年前の1008（寛弘5）年11月、『源氏物語』の著者、紫式部の日記に、この小説が貴族たちに読まれはじめていたことを示す記述があるため、2008年を「源氏物語千年」とすることになったのです。

紫式部は平安時代前期、役人の娘として生まれました。幼少時から聡明で漢文などを学び、後に一条天皇の妃、彰子に家庭教師役として仕えたこともありました。『源氏物語』を書き始めたのは夫と死別した直後とされます。現在の滋賀県大津市にある石山寺にこもり、構想を練ったともいわれ400字詰め原稿用紙にして2300枚余りにおよぶ長編小説を書き上げました。

『源氏物語』は、抜きでた貴公子である光源氏とその周辺の女性たちを中心に、貴族社会を人間性豊かに描いています。当時から貴族たちの間で評判になっていたらしく、『紫式部日記』には、一条天皇から称賛されたことや、『源氏物語』の登場人物の名前で呼ばれたことなどが書かれています。

西欧で名作とされるボッカチオの『デカメロン』やセルバンテスの『ドンキホーテ』よりも300～600年も早く、世界最古の長編小説といえます。20世紀には英訳もされ、海外でも高い評価を受けています。



石山寺紫式部源氏の間 紫式部は石山寺参籠中に『源氏物語』の構想を得たとされています。（滋賀県大津市・石山寺蔵）

## ● 細やかさを表現できる仮名文字

紫式部だけではありません。この時代、清少納言の随筆『枕草子』や藤原道綱の母の『蜻蛉日記』、菅原孝標の女の『更級日記』、和泉式部の『和泉式部日記』など、鋭い観察眼で書かれた女流文学が次々と登場しています。こうした優れた文学を可能にした大きな要因は仮名文字の発明でした。

漢字は、3世紀ごろまでに大陸や朝鮮半島から渡来してきた人々とともに、日本に入ってきたと考えられます。私たちの祖先は、その漢字を学んで使用しただけでなく、日本古来の物語や歌謡を記録するのに漢字を使い、古くからの日本語（やまと言葉）を表現したのです。



源氏物語絵巻 絵巻とは紙または絹を横に長くつなぎ、情景や物語を連続して表現したものです。屋根を省略して室内を描く構図が特徴的です。

その際、名詞の「フネ」や動詞「ノル」は同じ意味の漢字「船」「乗」をそのまま使えますが、漢語にない助詞「ノ」「ヲ」や助動詞、接続詞、送り仮名などは漢字の音を利用して表記するしかありません。そして日本語を読むようにしたのが、万葉仮名です。

しかし、万葉仮名では画数が多い漢字を使っていたので、「伊→イ」のように漢字の一部を借りた片仮名や、「波→は」のように漢字をくずした平仮名を独自につくりだしたのです。

漢字と仮名文字を比べると、漢字は激しく大仰な表現には適しますが、日本人らしい微妙な表現には適しません。たとえば「悲しい」は、漢字だけでも表現できますが、「うら悲しい」「もの悲しい」といった感性のこまかな表現は、漢字と仮名文字をあわせた漢字仮名混じりでないとできません。漢字で「豪雨」は表せても「そば降る雨」という表現はできません。

## ◎宮廷にできた文芸サロン

このように仮名文字は、日本人のものの感じ方のこまやかさを表現できる素晴らしい表音文字なのです。仮名文字の発明によって、日本人の文章表現は飛躍的に豊かになりました。

なかでも平仮名は曲線の優美な字体から女手と呼ばれ、宮廷の女官たちを中心に普及しました。女性たちの細やかな感性を表わすのに役立ち、優れた女流文学を育てたといえます。しかしほかの理由もありました。

紫式部の彰子だけでなく、清少納言が仕えた一条天皇の中宮、定子といった名門貴族出身の貴婦人を中心に、「文芸サロン」が形成されました。ここで女性たちは出身貴族の名誉や盛衰をかけて、知識や感性を競い合いました。

つまり、女流文学は比較的平和だった時代の、藤原氏を中心とした貴族社会が生んだ賜物でもあったのです。